

寸心會公開講演會記事

恒例の寸心會公開講演會は、秋漸く甜々の十一月十一日(金)午後二時より、法經第七教室に於て教育學部片岡仁志教授司會のもとに、開催せられた(聴衆三百)。高坂正顯教育學部長の開會の辭に引續いて行はれた講演は次の通りである。

一、三宅剛一氏(京大文學部(哲)教授) 身體について

一、河合良成氏(京大文學部(哲)教授) 西田先生の若かりし頃

【三宅剛一教授講演要旨】

人間と自然との關係から人間の現實を考へる場合、吾々は身體の問題に行き當らざるを得ない。身體は古くから精神との關係において取り上げられてきてゐるが、その殆んどが固定した見方に立つため眞の理解が得られてゐない。近世においても多くは兩者を別なものと見做し、その間を因果關係や平行關係といつた形で考へてゐるが、このやうな考へ方はいずれも身體を對象化してみるものであり、身體の意味を充分に明かにするものではない。又、身體を物としてみるのではなく、心的なものを含む表現的なものとしてとらへ、心身關係を表現作用としてみる立場も未だ充分でない。身體は單なる Object でもなく、又、それと對立した主體とみることもできない。主體的ではあ

るが純粹主體でもないところに身體特有の在り方がある。ここでは、この自分が身體をもつた人間的な主體として在るといふ事實を、それが我々の經驗の世界にいかなる形をとつて現れて來るかといふ見地から、みることにする。

我々が身體をもつといふことは、この世界に現實的な存在者として場所を占め、現實の世界に割り込んで *exist* してゐるといふことと一つである。現實は單に可想的ではなく、どこまでも經驗的に、現にそこに現れてゐて、*actual* に働くものである。そのやうな現實は身體をもつといふことと切離しては考へられない。ライブニッツも、「身體なきものは宇宙の秩序からの脱走者である」と言つてゐる。身體をもつといふことによつて精神そのものが現實としてあるのである。精神が個性をもつて歴史的現實の内にあるといふことは、私が身體をもつといふことと同じである。

身體をもつた我々の經驗的な仕方、その時その時の體験といふ形をとる。思惟作用も感性的な今の體験としてのみ現實に起るのである。體験は流れをなすといはれるが、それは常に今を頂點として起り、今に向つて流れ來り、今から流れ去る。生きられた體験の今は一般的抽象的な内容としてどこへでも移すことのできるものではない。このやうに身體をもつて *exist* してゐる我々に對して、感性的世界は此處を中心とする遠近法的な擴がりとして現れる。更に感性的世界は單に遠近法的に知覺されるだけでなく、一種の表現性をもつて、或る表情、氣分をもつて現れる。このやうな、今此處といふ形で起る身體的な

體驗は、單に内的なものでなく、外へ向つて物に働きかけ、物を動かす。そのために身體は道具を使用し、又身體自身もそれに特有な仕方で道具的な性格をもつ。即ち、それ自身道具でない私は、性質的に誰それのといふ性格のない道具を私の身體をもつて使用するといふ形で *being* してゐるのであり、そのことによつて現實の世界は道具聯關として現れる。これに對し、身體を力學的物理學的聯關の中でみると、人間は單なる道具・機械となり、私の身體といふことも意味を失ひ、他人との現實的な交りも成立しない。先方に通ずる交りによつて他人との主體の共存が現實に可能となるのである。

身體をもつた人間の共存の現實的な仕方としては、表情・身振りを含む廣い意味での言葉と、性が考へられる。話しをするといふことによつて人との共存的生が設定されるのであるが、しかし社會的な共存は習慣化し、従つて言葉も常套的になる。さういふ傾向に反抗し、言葉を個性的に生かし、言葉を通して新しい生體驗を創造するのが藝術である。そこに現されるものは單に意味でなく、イメージであり、身體をもつて考へる藝術家の直觀、思想といへる。言葉による話し合ひは常に或るニュアンスをもつてなされ、そこに共感による生の高揚擴大が種々の形で體驗される。

次に、河合良成氏は西田先生が四高で教授をされてゐた時代親しく接觸されて先生から受けた偉大な人間的影響や、先生の

壯年時代の思ひ出について語られた。論理學の時間に、ディレンマの例として話されたといふ體の話などユーモアの中にも特に吾々の關心を唆るものがある。

河合氏の講演の後、天野貞祐京大名譽教授の挨拶、植田壽藏京大名譽教授の閉會の辭があり、五時散會した。(川崎)

京都哲學會公開講演會記事

京都哲學會公開講演會は、寸心會講演會の翌十一月十二日(土)午後二時より、文學部第一教室において、有賀鐵太郎教授司會のもとに左記の如く行はれた(聴衆三百)。

一、西谷啓治氏 (京大文學部 宗教的實存)

一、V.C. オールドリッチ氏 (米國オハイオ州 ケニヨン大學教授) *Philosophy and Language*

(通譯 京都大學 文學部教授 野田又夫氏)

【西谷啓治教授講演要旨】

西谷啓治教授は大乗佛敎によつて宗教的實存の問題を説かれた。佛敎は現在聖道門と淨土門の二つに分れてゐて、全く違つた宗教性に立つてゐるやうに見える。しかし、それらが分れて來る根本には、兩方に共通な、同じ佛敎としての基本的な立場がある筈である。それを如何なるものと考へるべきか。同様の問題は例へば、キェルケゴールにおける宗教性Aと宗教性Bとの關係においてもある。宗教性Bは罪の存在としての人間と神との間の逆説的關係とそれに對するキリスト敎の信仰において成立するとされるが、キェルケゴールはそこに自ら古來キリス

ト教神秘主義が強調して来た Nachfolge Christi といふ立場を出して來てゐる。神秘主義的傾向は宗教性 A に屬すべき管と思はれるが、彼においてはそれが却つて宗教性 B、即ち信仰の立場と一つに結びついて現れてきてゐる。個人が神の前に負ひ目をもつたものとして立つ時にのみ、彼は信仰に達し、キリストにおける神との神秘的合一に達し得る、とキェルケゴールは言ふ。即ち、パラドックス或ひは絶対の矛盾を神秘的合一と一つにしたやうな立場が現れてゐる。しかし、さういふことが如何なる基礎の上で可能であり得るかといふ點になると、キェルケゴールでは未だ問題が残されてゐる。

この問題は暫く措いて、ここでは「同時性」の概念を基礎にして、維摩經に現れた淨土の觀念によつて考へる。維摩經においては、「その心の淨きに隨つて佛土淨し」といはれ、「直心は是れ菩薩の淨土なり」といはれる。直心とは自らに集中した眞直の心、恰もレンズを通して焦點に集中した光が火に化するやうな純粹の心であり、意識の段階における主觀客觀の對立を破つて一步出たところに開かれる次元である。心は意識や心理の心ではない。我々の存在そのものの根底に開かれる das Offene に立つ眞存である。しかもその心が土と一つに考へられてゐる。その心とは所謂「超越」の次元として、存在するものを成立させる根元的な場である。我々自身の根底に *existentialisch* に、普通の我を超えた場を開くことであり、そこにおいてはじめて「もの」が存在するのである。その場は衆生がそこに成立する場である。このやうにして直心は即ち菩薩の淨土な

のである。「菩薩成佛のとき不誦の衆生來つてその國に生ず。」眞存の完成は同時に土といふ意味をもつ。

この眞存の立場は凡夫の在り方を超えたものであり、しかもまた凡夫でないものでもない。「凡夫に非ず、凡夫の法を離れたるにも非ず」、また、「一切の煩惱が如來の種である」と言はれる立場である。そこでは絶対の自己開示が人間の絶対への努力と相即し、自分から開くといふことが向ふから開かれるといふことと一つに切れ合つてゐる。そして心即土、土即心といふことはどこまでも歴史の内での *Geeshen* でなければならぬ。歴史的存在者としての我々が、我々の内にさういふ場を開くことは、歴史自身の根底を開くといふことでなければならぬ。業から脱するといふこと、即ち、心土の「淨」の生起といふことは歴史的な生起である。業とはあらゆる文化を含めて世界歴史Ⅱ「世俗の歴史」の底に働く力である。業は歴史形成の力である。そこに一番深い意味での歴史、歴史の根底がある。歴史の業を破るものが我々自身の存在の根底であり、また我々自身の存在を破るものが歴史の根底からの絶対の現れである。人間が佛の内に生まれ(佛への攝取)、そのことにおいて佛が人間の内に生まれるといふことは、どこまでも歴史的な生起として成立する。佛と人といふことは時間の内に永遠が現れることであり、また逆は、人と佛といふことは時間が永遠の内深く掘り下げられて行くことである。そこに「瞬間」における時と永遠との綜合が成立し、時と永遠、永遠と時の兩方向が一つに深く切り結ぶやうな心土の「淨」の生起が歴史の根本であ

る。

このやうに時が時の上に永遠の性格をもつといふことが同時性である。それはどこまでも歴史を超えない。しかも歴史の内に時間のままで時間を超えた場が開かれるのである。親鸞は彌陀の五劫思惟を親鸞一人のためとして受取つた。彌陀の本願成就は、この世界の歴史上の如何なる過去の衆生にも先立ち、その意味で絶対の過去である。その絶対的な過去は、親鸞に念佛申さんと思ひ立つ心が起つた時、即ち、親鸞のその歴史的な、日附をもつた現在において出遭はれたのである。永遠はそこにおいてどこまでも絶対の過去でありながら、しかも同時に歴史的な現在として、どこまでも歴史の内、歴史の根底で出遭はれるのである。同時に、淨土はこの世界の歴史における如何なる將來の衆生にとつてもより將來的であり、その意味で絶対の將來である彌陀の本願成就は淨土の建立であり、信心においてその絶対の將來である淨土に現在において出遭はれる。絶対の過去と同時的といふことは、直ちに絶対の將來と同時的といふことであり、同時性とはこのやうにして時と永遠との綜合の場として現在の根底である。宗教的實存の意味はさういふところを開くといふところにある。

次に、オールドリッチ教授の講演は野田又夫教授の通譯によつて行はれた。同教授の論旨は、現世紀に起つた記號論理學や論理實證主義における言語の意味の論理的分析の問題及びその

反省から漸次展開されて來た新しい言語哲學の成立を歴史的に回顧し、特に傳統的なヨーロッパの形而上學との聯關において生ずる種々の問題史的発展にふれ、最近のオックスフォード學派の立場を明かにするところにあつた、その詳細については本號に論文が掲載されてゐるので、ここでは省略する。

講演會は六時過ぎに終つた。特に感銘にたへないのは西谷教授が病軀をおして登壇され然も胸に泌み入る如き口調で二時間近くも講演せられたことである。オールドリッチ教授亦熱辯を振つて自己の立場を明確に打出され、立錫の餘地なく會場を埋めた聴衆はこの白熱的寒國氣に魅了されてか肌寒き夕闇迫り來るを忘れて最後迄熱心に傍聴したのであつた。

終了後樂友會館に於てオールドリッチ講師を圍み、盃を交しつゝ歡談した。席上武内助教の熱心な議論は今猶印象に鮮かである。なほ本京都哲學會はオールドリッチ教授を特別名譽會員として迎へ、今後の研究の交換を約したことを附記する。

(川崎)

新着外國雜誌所載論文一覽

一 哲 學 一

PHILOSOPHY AND PHENOMENOLOGICAL RESEARCH,
Vol. XV, No. 4, June 1955.

Roelofs, Howard D.: A Case for Dualism and Interaction.

- Yolton, John W.: History and Meta-History.
 Hamburg, Carl C.: Logic and Foreign Policy.
 Farrell, B. A.: Intentionality and the Theory of Signs.
 Lenneberg, E. H.: A Note on Cassirer's Philosophy of Language.
- Mays, W.: Determinism and Free Will in Whitehead.
 Chaudhury, P. J.: Knowledge and Truth: A Phenomenological Inquiry.
- PHILOSOPHY AND PHENOMENOLOGICAL RESEARCH,
 Vol. XVI-No. 1, Sept. 1955.
- Polin, Raymond: Against Wisdom.
 Fingarette, Herbert: Psychoanalytic Perspectives on Moral Guilt and Responsibility: A Re-evaluation.
 Armstrong, A. Mac.: Ethics as the Study of Ideals.
 Stolnitz, Jerome: Notes on Comedy and Tragedy.
 Popkin, Richard H.: The Skeptical Precursors of David Hume.
- THE REVIEW OF METAPHYSICS, Vol. IX-No. 1 (No. 33), Sept. 1955.
- Fitch, Frederic B.: The Reality of Propositions.
 Lawrence, Nathaniel: Causality, Will and Time.
 Stallnecht, Newton P., Wade, Francis G., and Earle, William: Freedom and Existence: A Symposium.
- ARCHIV FÜR PHILOSOPHIE, 5 3, April 1955.
- Sandgathe, Franz: Ein Vorschlag zu einer Änderung der speziellen Relativitätstheorie.
 Shellen, Max Salomon: Von den Dingen, die sich auch anders verhalten können.
- Scholz, Heinrich: Zum gegenwärtigen Stande der mathematischen Grundlagenforschung.
 Janssen, Otto: Zur Frage des menschlichen Sins.
 Tenbruck, Friedrich: Eine Bemerkung zu einer Fußnote Kants.
- SCHOLASTIK, XXX Jahrgang (1955)-H. III.
- Maier, Anneliese: Die naturphilosophische Bedeutung der scholastischen Impetustheorie.
 Ogiermann, Helmut: Der metaphysische Satz der Kausalität.
 Stenzel, Alois: Cyprian und die „Taufe in Namen Jesu.“
 Pelster, Franz: Zwei Untersuchungen über die literarischen Grundlagen für die Darstellung einer Mariologie des hl. Albert des Großen.
 Weisweiler, Heinrich: Aus Geist und Kultur des Frühmittelalters. Neuerschlossene Werke des 9. bis 12. Jahrhunderts.
- Wolter, Hans: Wesen und Grenzen päpstlicher Gewalt im Mittelalter. Ein Forschungsbericht.
- SCHOLASTIK, XXX Jahrgang (1955)-H. IV.
- Häring, Nikolaus M.: Character, Signum und Signaculum. Die Entwicklung bis nach der karolingischen Renaissance.
 Brinkmann, Bernhard: Für und gegen die Entmythologisierung der neutestamentlichen Botschaft.
 Trapp, Georg: Seelenvermögen und Schichten des besetzten Leibes. Über Ansätze zu einer Schichtenlehre in der Darstellung der Seelenvermögen bei Thomas von Aquin.

Brugger, Walter: *Aporetik, Analogie und Religion. Zur Grundlegung der Religionsphilosophie von Hans Wagner.*

Grillmeier, Alois: *Erforschung und Entwicklung christlicher Christologie heute.*

REVUE DES SCIENCES PHILOSOPHIQUES ET THÉOLOGIQUES, Tome XXXIX-N° 2, Avril 1955.

Brüning, W.: *Individualisme et personnalisme dans la conception de l'homme.*

Dondaine, H.-F.: *Le premier instant de l'ange d'après saint Thomas.*

REVUE DES SCIENCES PHILOSOPHIQUES ET THÉOLOGIQUES, Tome XXXIX-N° 3, Juillet 1955.

Dreyfus, F.: *La doctrine du reste d'Israël chez le prophète Isaïe.*

Geiger, L.-B.: *Philosophie réaliste et liberté. REVUE PHILOSOPHIQUE DE L'ÉTRANGER, LXXX^e Année, N° 4 à 6, Avril-Juin, 1955.*

—[Morale, Droit, et Sociologie]—

Lalande, A.: *Valeur de la différence.*

Gaudemet, J.: *Tendances et méthodes en Droit romain. REVUE PHILOSOPHIQUE DE L'ÉTRANGER, LXXX^e Année, N° 7 à 9, Juillet-Sept., 1955.*

—[Histoire de la Philosophie]—

Robinson, R.: *L'acrasée selon Aristote.*

Canguilhem, G.: *Organisme et modèles mécaniques.*

Réflexions sur la biologie cartésienne (I).

Rochot, B.: *Gassendi et la «Logique» de Descartes.*

—社會學—

THE BRITISH JOURNAL OF SOCIOLOGY, Vol. VI-No. 1.

Arnold, G. L.: *Collectivism Reconsidered.*

Fortes, M.: *Radcliffe-Brown's Contributions to the Study of Social Organization.*

Goldthorpe, J. E.: *An African Elite.*

McGregor, O. R.: *The Social Position of Women in England 1850-1914: A Bibliography.*

Roshwald, M.: *Social Class Structure in a Fluctuating Community.*

Jahoda, G.: *The Social Background of a West African Student Population: II.*

Smith, J. H.: *The Scope of Industrial Relations.*

THE BRITISH JOURNAL OF SOCIOLOGY, Vol. VI-No. 2.

—[Conference of the British Sociological Association 1955]—

Butler, D.: *Voting Behavior and It's Study in Britain.*

Stoetzel, J.: *Voting Behavior in France.*

Mckenzie, R. J.: *Power in British Parties.*

Mackenzie, W, J. M.: *Pressure Groups in British Government*

Durant, H.: *Public Opinion, Polis and Foreign Policy.*

McLachlan, D.: *The Press and Public Opinion.*

Younger, K.: *Public Opinion and Foreign Policy.*

Lipset, S. M.: *The Radical Right: A Problem for American Democracy.*

KÖLLNER ZEITSCHRIFT FÜR SOZIOLOGIE, 6. Jhg. (1953
/54)-Heft. 3.

[Verhandlungen des Zweifften Deutschen Soziologenta-
ges und der dritten Anthropologisch-soziologischen
Konferenz van 15 bis 17. Oktober 1954 in Heidelberg.]—

[Soziologentag]

Vorträge über das Thema: Zum Ideologie-Problem.

: Die freien Berufe.

[Anthropologisch-soziologische Konferenz]

Referate über das Thema: Das Kind.

— 宗 教 學 —

THE JOURNAL OF RELIGION, Vol. 35-No. 1, Jan. 1955.

Niebuhr, H. Richard: Theology—Not Queen but Ser-
vant.

Taubes, S. A.: The Absent God.

Newbigin, L.: The Quest for Unity through Religion.

Desroche, H.: Areas and Methods of a Sociology of
Religion—The Work of G. Le Bras.

THE JOURNAL OF RELIGION, Vol. 35-No. 2, Apr. 1955.

Hazeltin, R.: Pascal and Jesus Christ—Reflections on
the "Mystère de Jésus".

Hacker, F.: Psychiatry and Religion.

George, K. & C. H.: Roman Catholic Sainthood and
Social Status—A Statistical and Analytical Study.

受 贈 圖 書

Murti, T. R. V.: Central Philosophy of Buddhism
(1955, London, George Allen & Unwin, 30 S.)

受 贈 雜 誌

史 學 雜 誌 (史學會)
第六十四編第十號、十一號

美 國 語 文 學 (美學會)
第二十二號

國 語 國 文 林 (京都大學國文學會)
第二十四卷第十號、第十一號

史 林 (京都大學文學部內史學研究會)
第三十八卷第六號

經 濟 論 叢 (京都大學經濟學會)
第七十六卷第四號、第五號、第六號

一 橋 論 叢 (一橋大學一橋學會)
第三十四卷第四號、第五號、第六號

立 命 館 文 學 (立命館大學人文科學研究所)
第一二五號

宗 教 研 究 (日本宗教學會)
第一四五號

山 口 經 濟 學 雜 誌 (山口大學經濟學會)
第六卷第五號、第六號

哲 學 雜 誌 (東京大學文學部內哲學會)
第七一九號

東 洋 史 研 究 (京都大學文學部內東洋史研究會)
第十四卷第三號

心 理 學 研 究 (日本心理學會)
第二十六卷第三號

密 教 文 化 (高野山大學內密教研究會)
第三十一號

經 濟 學 の 進 歩 の ため に (東京都立商科短期大學研究報告)
第一卷第二號